想いと創作を結ぶ「蔵」

黒い建物がアトリエの蔵

建築を学ぶ中でイラストを仕事に

東京・千住は歴史も人情も商店街も路地も飲み屋もある、昔と今が自然と混在する下町風情のまち。江戸時代には日光街道の一つ目の宿場「千住宿」として賑わった。かの松尾芭蕉も千住大橋から奥の細道へと出発したといわれている。

わたしは1999年からこのまちに住み、イラストを仕事にしている。アトリエの建物は、大家さんによると、もとは餅菓子店の小豆を貯蔵するための土蔵で、築約200年という。戦後に水道、ガス、トイレをつけて住宅に改築され、下見板張りの玄関部分が増築された。漆喰がはがれ落ちるから、外観は全体に黒いトタンで、内部はベニヤ板で覆われている。蔵というと立派なものを想像するかもしれないが、愛すべきなかなかのボロ具合だ。すぐ目の前には昔ながらの銭湯があり、ひと風呂浴びてから帰宅することも多い。窓の隙間から聞こえるまちの音をBGM代わりに、いつも楽しい気分で絵を描いている。

しかし、もともとは学生時代は建築家を志し、大学、大学院と建築を勉強していた。岩手県の田舎娘だったわたしは高校卒業と同時に上京。設計を学びながら「建築MAP東京」（TOTO出版）を片手に、都内の現代建築を積極的に見て回っていた。ところがいつの間にか、現代建築よりも、古いまち並みのほうに惹かれるようになっていった。育ったところは隣の家もないほど自然に囲まれた環境だったせいか、生活感漂う細い路地や長屋などの木造住宅、昭和の香りのする看板建築、同潤会アパートメントなど時を重ねた建築は新鮮で魅力的に映った。さらに東京のまち並みを学びたくなって進んだ大学院では、建築都市史を専攻し、小さな自転車で、本当によくいろいろなまちを見て回った。

アトリエ周辺でのスケッチはなかださんにとってごく日常的なこと

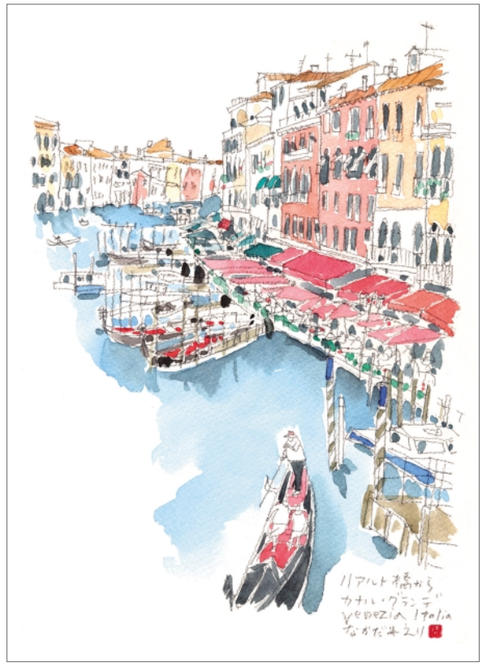
そんなときに出会ったのが千住だった。きっかけは、宿場町の名残として蔵を探すまち並み調査に参加したこと。今では「蔵のまち千住」といわれることも増えたが、当時はいったい何棟あるのかも把握している人はいなかった。調査中に偶然空家になった蔵、それが今のアトリエだ。

自然に身を任せるのがこだわり

まち並み調査に参加したこの年は、わたしの人生において大きな転機となる出来事が三つ訪れた。一つ目は建築という視点から、この蔵に出会ったこと。二つ目は大学院の恩師である陣内秀信教授が、まち並み調査のときにわたしのスケッチをご覧になり、在学中にもかかわらず著書のイラストレーターに抜擢してくださったこと。三つ目は岩手の父が病気で亡くなったこと。闘病中の父に毎日欠かさず、計110枚の絵手紙を送り、案じていた千住での新生活の様子を伝えた。

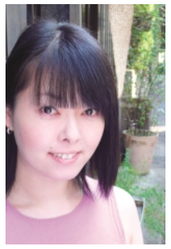
これらがそれぞれ相互に関係して、今のイラストレーターとしての自分があるように思う。イラストは、わたしが大事に思う人やものとの繋がりのなかから自然に出てきたもので、建築と全く違うものだとは思っていない。この千住、この蔵という場所を特別に、大切に思い、知人友人、ご近所さんなど多くの人たちに恵まれ、支えられてきたことに感謝している。

人によって、友達に話したり、文章に書いたり、設計したりと、好きな方法で表すように、わたしにとってイラストは、いわば出会った素敵なものを表現するための一つのツールだ。取り立てて掲げるような夢やこだわりを持たず、自然に身を任せることが、あえていえばこだわりなのかもしれない。



イタリア・ヴェネチアのリアルト橋から見たカナル・グランデ（大運河）。なかださんがイラストの仕事を始めた頃に描いたスケッチ

千住の代名詞的な居酒屋「大はし」、煮込みがおいしい



なかだ えり氏

岩手県一関市生まれ。日本大学生産工学部建築工学科卒。法政大学大学院修了。本の挿し絵、建築設計、執筆など多分野で活動中。1999年から東京・千住の蔵をアトリエにしている。著書に「とらえどころのない曖昧な輪郭」（駒草出版、絶版）。現在、読売新聞にて「なかだえりのさんぽるぽ」を連載中。

なかだえり氏ホームページ
http://www.nakadaeri.com/